



赤の償い

白球と海星

高木徳一

赤の償い

・
・
・
・
・
・
・
・
・
2

白球と
海星

・
・
・
・
・
・
・
・
18

赤の償い

か細い肩と股を剥き出しにした涼しげなランニング姿の誠太郎は土間に下り、しゃがみ込んで坊主頭を動かさずに父の手元をじっと見詰める。父親は幾分忝げた頭を豆絞りの手拭で締め付け、筋肉質の腕を上下させ、太い針操る。汗が額に浮かぶ。緑の縁がい草の匂いに密着し縫い込まれてゆく。無言を貫き通す。

時折り、隣の医院のヤギの鳴き声がうめえー、うめえーと褒めているように聞こえる。

夏が過ぎ、秋を迎えると裏庭の葡萄棚には房が垂れ下がり、それらが食卓に上り、家族の舌に甘味を残す。

母親が営む駄菓子屋では菓子の他に、メンコ、ベーゴマ、剣玉、凧なども売つており、子供達が買ふ求め、誠太郎も遊びの仲間に加わる。

東隣の関本小児科医院には風邪引きのたびに駆け込み、ふくよかな女医さんに診て貰つっていた。家の西隣と裏の北側は横手ゴム工業（株）の敷地が広がつていて、五米幅の通りの向かい側には事務所がある。社長の邸宅は工場の更に西側に和洋折衷の豪華な建物。誠太郎は次男の慎司とは四五、六年で同級生となり、互いの家に行き来した。二人は餓鬼大将らの尻に付いてヤギに紙と一緒に輪ゴムを食べさせたり、かくれんぼや相撲をしたりして、材木置き場の真新しい檜板を泥の運動靴で踏み付けたりした。材木置き場は畳の仕事場の東隣に広くあり、その真ん中は医院への通路となり、斜め前にも点在している。材木の営業所は中川に架かる高砂橋から柴又帝釈天に向つて西に走る高砂大通りと医院の横を流れる小川と交差する矢付き橋の角にあり、当時としては珍しい二階建ての日本家屋。その次の次男一夫も同学年で遊び仲間の一人である。小川ではたらい舟に乗つたり、

家鴨と一緒に泳いだりした。

坊ちやん刈りの細面の慎司と体格の立派な一夫のお大尽組は共に私立の有名中学に入り、疎遠となつた。誠太郎は地元の小学校と中学校を卒業し、都立葛飾野高校が拾つてくれた。

幼い頃からい草のツーンとする刺激を受け、材木置き場で大工が鋸や鉛で檜の香りを一層引き出し、いた環境から建築士を目指そうと思った。姉と二人の弟がいるので、経済面から私大は難しく、地方の国立大の建築学科に何とか滑り込め、下宿生活をする。生活費や授業料は家庭教師の掛け持ちでしのぐ。卒後、住宅の設計・設備の中堅会社に就職して実務を経験し、四年目で一級建築士の免許を取得出来た。

見合い話が一年前から持ち上がつていたが、免許取得まではと断つっていた。四歳下の星純子と結婚し、近くのアパートに世帯を構え、翌春には桜満開の下、早々と長男誠次が産声を上げた。

父は六十三歳の秋口に、新調した畳をリヤカーで運搬中にぎっくり腰になり、治らずに無念のリタイアをする羽目になる。

父母を初め、妻の貯金も搔き集めて改築する事にした。姉の香代は既に立石の家具店に嫁いでおり、三歳下の健太郎は大手自動車会社のセールスマンで、結婚後アパート暮らし。五歳下の康太郎は葛飾区役所財務課勤務である。

平屋を二階建てにして、山梨のぶどう園の五勇坊である父が愛着を持つて面倒見ていた葡萄棚は失くすのに忍びず、半分に削り、その分平屋の作業場を広げた。車は貸しガレージを利用する。駄菓子屋を辞めた母に孫を世話して貰い、妻は事務を担当し、夜間、珠算と簿記を習いに出掛け、二年後に三級に合格した。翌年に長女花江、一年置いて次男太郎を授かり、母の手は忙しくなつた。この時点で事務員を一人増やしたのだ。

木枯らしがガラス引き戸を叩く夕暮、改築直後

白球と海星

一・投影

裸電球の下、妖しく浮き出る裸身の影が畳に深く沁み込み、六畳一間のアパートで思い詰めた女が男に対峙する。

雨脚が一段と激しくなり、内なる激情が更に増幅する。

乙女から女に生まれ変わる、丸味を帯びた柔肌を凝視せざるを得ない男が居る。

男の脳から送られる過去の映像が女の胸部から腹部に投影され、それを再び網膜でキャッチする。

二・開花

昭和二十五年の梅雨時の或る日、小学一年生の

青葉元良は母みどりに手を引かれ、黒皮のランド

セルを背負い、胸を張つて葛飾区立吉住小学校に向つた。

校門横の大きな枝垂れ柳は雨滴を軽く受け流す。黒い蝙蝠傘を片手に、禿げ上がった眼鏡顔がにこやかに声と同時にお辞儀する。

「おはようございます」

母親らの黄色い声が響き合う。

元良も口を尖らし元気良く挨拶する。

「見なさい。校長先生は雨の日も風の日もあそこに立つて、皆の顔色はいいかな、事故に遭つていなかと心配しているの」「でも、長くいて寒くないの」「誰もが可愛いから見守つてみたいのよ」八時半丁度に、校長自らかんぬきに四角棒を通して、大門を閉める。

遅刻した児童は大柳が見下ろす横の小さな潜り戸から入る。

元良は体格が良く、クラス四十人中後ろから二番

目と大きい。勉強より運動大好き人間で母譲り。
両親に似て目もくりくりしている。

小学三年の秋の空は、抜けるような青で奥深い。
大運動会の文字が白と赤の紙花に飾られ、正門の
上にでんと腰を下ろし、児童を迎える。

咲いた 咲いた チューリップの花が・・のリズ
ムに合わせ、妹の奈穂ら一年生が両手で花の形を作り、男女見合つてニコッと笑う。

元良らの五十米走が開始された。号砲一発、元良
はカーブでトップに躍り出て、直線で更に加速し、
二位以下をぶつちぎり、一位の旗の下に並ぶ。
代表がノートの賞品を校長より受け取る。

父良一郎は元良の奮闘に刺激され、パン食い競争
にエントリーした。

「がんばれー、がんばれー、父さん！」

元良は声を限りに叫んだ。たるむ糸は中々切れず、
応援の甲斐なく、どんけつでゴールに辿り着く。
一橋大出の父親はそもそも脚に自信はなかつた。

午後のトップを飾り、学年別紅白対抗リレーが始まる。胸差で赤が勝ち、元良にもう一つ勲章が増えた。綱引きには、汚名挽回とばかりに再び父が飛び出した。掛け声宜しく引っ張り合う。父は家族の方に向き、両手を高々と上げ、万歳をした。「元良、父さんもやつたぞ」と口を動かす。

次は母の出番となる。オイチ二、オイチ三と掛け声勇ましく、リズムを取る母。元良も負けじと結ばれた足を前に出しが、母の加速は凄まじく、自分の足は宙に浮いた。他を三メートル離し、テープを切った。種を明かせば、母は東京女子体育大の卒業生である。

こうして、元良の独壇場である運動会も無事に終了した。

冬になると、達磨ストーブに薪を入れ、燃え広がつたら少しづつ石炭をくべる。雪を乗せると、ジューと叫んで瞬く間に消え、こんがり焼いたコツ。パンを頬張る。雪合戦では小石を入れて固め

ると遠くまで飛ばせる。勿論、男子を目掛けるのだが。戦いに疲れ、敵味方仲良く雪達磨を作り、バケツを裏返して帽子代わりにした。

春が巡り来ると、教室の引き戸に黒板消しを挟む。体育を教えに来た眼鏡のドンちゃんが力任せに戸を開けるや、桜吹雪のように粉が舞い散る。白化粧の眼鏡は怒鳴り付けるが、犯人は名乗り出ず。水を打つたように静まり返り、仁王様のような真っ赤な顔になつた先生は職員室に戻つてしまつた。

初夏が訪れると、理科の実験材料の蛙捕りに出掛けた。裏門を出て、寺院横の池に遭つて來た。ギヨロ目を水面に浮かせて鳴くトノサマガエル。狙い定めて網を被せた。観念した五匹が虫籠の中に入つた。打球は放物線を描き、大樹の陰に隠れたかと思つた瞬間、皆一斉に蜂の子を散らし、たとう乾いた大音響が全員の鼓膜を振動させたからである。

「何處の餓鬼だー、田圃を荒らしているのは！」突然、髪を振り乱し、棒を振り上げたもんべ姿が迫り來た。仲間五人は一目散に逃げ出す。

翌日、澄まし顔の明美が机の蓋を開けるや金切り声を発した。

「誰だ、こんな悪戯をする奴は」

元良は叫び、自分の蛙を捕まえる。

四年生になつた元良は餓鬼大将として放課後、手下を誘い近くの原っぱで三角ベースを作つた。五回までで五対零とリードを奪つてゐる。これじやあ、面白くないとばかりに、一壘手の善ちゃんにソフトボールを渡し、自ら投手を交代する。

途端に、敵は内外野の間を抜ける打球を打ち始め、アツと言う間に五対八と逆転されてしまった。

最終回の七回の裏に、二死一、一壘で三番元良が打席に入った。打球は放物線を描き、大樹の陰に隠れたかと思つた瞬間、皆一斉に蜂の子を散らしたよう逃げ出す羽目に陥つた。ガシャーンとい

二学期が始まり、担任の小島千恵子先生が紫止

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。